

## 『分別と多感』：防御としての礼儀

*Sense and Sensibility : Civility as Defense*

入 野 賀和子

Kawako Irino

ジェイン・オースティンが『分別と多感』(1811)の執筆に取り掛かったのは、1797年11月、彼女が22歳の頃で、それ以前に書かれていた登場人物も筋の展開もほぼ同じ、書簡体小説の形をとる『エリナとマリアン』という作品を改めて書き直したものとされている。またこの三箇月前には、後に『自負と偏見』(1813)として書き直しをされることになる、同じく書簡体小説の『第一印象』が書き終えられている。<sup>(1)</sup>『分別と多感』も『自負と偏見』も共に、すでに書き上げられていた作品を改めて書き直した作品であり、出版に至るまでの十数年の間にどのくらいの改変が行われたかは定かではない。しかし20歳から22歳にかけて相次いで書き上げられた作品を基とするこれら初期の作品は、その題名が示すように分別、多感、自負、偏見といった二つの対立する概念を並置することにより、そこに何らかの倫理的判断を持ち込もうとする18世紀的小説の典型的な手法を色濃く残した作品と言える。オースティンは少女時代から慣れ親しんできた小説の手法を土台にしながら独自の作品世界を作り上げていった作家である。そしてオースティンの作品の出発点とも言えるこの手法は、『分別と多感』に最も顕著にその特徴を残しているように思われる。

二つの概念を並置して描き出す場合、エリザベスとダーシーといった男女の組み合わせよりも、常に行動を共にする二人の姉妹にそれぞれの概念を体現させた方が、より鮮明に比較対照の効果を上げることができる。『分別と多感』では「分別」の役割を担わされているのは、姉のエリナであり、「多感」を象徴しているのは妹のマリアンである。この姉妹の違いを明確にするために、オースティンはエリナとマリアンの恋の展開を交互に、しかもその恋の展開を非常に似通った状況の設定で描き出していく。エリナがエドワードの本心を確認できぬままにノーランドを去ると、彼と入れ替わるようにマリアンの前にウィロビーが登場する。そしてウィロビーが突然姿を消すと、今度はエドワードが登場するといったように、謎がさらに深まった時点で主役が交替して物語が展開されていく。エドワードとウィロビーが顔を合わすことは決してない。エリナの物語とマリアンの物語が、ある種整然と交互に語られるが、その几帳面なまでの整然とした枠組ゆえに、と言うよりは、そのような枠組にも係わらず、この作品にはブッシュの言うように一種の心理的サスペンスがある。<sup>(2)</sup>

作品の構成は非常に分かり易い整然とした枠組を保っているが、この作品から受ける印象は、それ程単純明解なものではない。それはこの作品の主題となっている“sensitivity”という語が様々な意味合いを込めて重層的に使われているからである。18世紀から19世紀にかけての時

代のキーワードとなるこの言葉は、肯定的な意味合いから否定的な意味合いまで時代の変遷と共に共感と反発を伴って使われてきた言葉である。

オースティンは17歳頃に、もうすでに sensibility の自己中心性や偽瞞性を思いきり笑い飛ばす書簡体による「恋と友情」というパロディを書いている。「自分の友人、知人そしてとりわけ自分自身の難儀に対して震え慄くほど鋭敏な感受性」<sup>③</sup>を持つローラと、「全身これ感受性と鋭敏さの固まり」<sup>④</sup>のようなソファイアは、「高尚な考え、繊細な感情、洗練された感受性」とは無縁な存在を全て軽蔑すべき対象として切り捨てていく。エリナは「義務と願望、親と子の対立という昔ながらのお決まりの悲嘆の種」<sup>⑤</sup>と、息子のエドワードを意のままに扱おうとするフェーズ夫人の横暴に溜め息を漏らす。ローラとソファイアは sensibility を正義の旗印に、世の価値観をそっくり逆転させて見せる。父親の言いなりになって結婚しようとした娘に対して、「父親がこの男を選んだこと自体、彼にとっては大変不利で、たとえ他の全ての点においてお相手として相応しい人物だったとしても、それだけでこの男を拒絶する十分な理由になったはずです…父親に背くことこそ、義務とすべきです」<sup>⑥</sup>と、その娘を唆して駆け落ちに至らせ、またそのような卑劣な父親への懲らしめとして「善意」で彼の引き出しから紙幣を抜き取るなどの善行を施す。かと思うと贅沢三昧の生活の揚げ句、夫が投獄され財産が差し押さえられそうになったり、あるいは馬車の事故で瀕死状態に陥った夫に再会する場面などでは「私達に他に何ができるというのでしょうか」と気絶を繰り返す。この作品の中でオースティンは当時の感傷小説の不自然さを徹底的に揶揄すると共に、sensibility のもつ独りよがりな自己中心性の負の性質に目を向けている。sensibility が「鋭敏で洗練された感受性」から「自己耽溺」まで流動的かつ重層的な使われ方をしている語であることにすでに着目しているのである。

『分別と多感』でも、物語は形の上ではエリナとマリアンの恋を交互に対比させながら進行し、二人の恋が抑制と奔放を象徴するかのような展開を見せる。オースティンの最初の構想としては、それまでの伝統的手法を受け継ぎながら彼女なりの味付けをして分別と多感を対比させることを意図していたかもしれないが、物語の進行と共にオースティン自身の姉妹を扱う姿勢も流動的で、エリナとマリアン両者への共感が交錯し合うようになっていくように思われる。分別と多感を一元的に並置、対立させるような単純な構図ではなく、sensibility のもつ意味合いの重層性に主眼が置かれていく。そもそも最初からエリナもマリアンも、同等の能力と魅力を持った女主人公として造型されている。

エリナは…しっかりした理解力と冷静な判断力を持っていた。…心根の大変やさしい娘だった。愛情深く、激しい感情の持ち主だったが、彼女はそれを抑える術を知っていた。(4)

続いてマリアンが紹介される。

マリアンの能力は多くの点でエリナにひけをとらないものだった。彼女は賢明で利発だった。しかしあらゆることに熱烈に反応した。悲しみも喜びもほどほどということがなかった。寛大で気立てがよく、興味をかき立てられる娘だったが、慎重さだけには縁がなかった。(4-5)

エリナもマリアンも共に sense と sensibility を持った人物として登場している。ただ違っているの

は、エリナが19歳にしてすでに、ともすれば軽率な行動に走りかねない母親の良き相談相手であり、社会と折り合っていくようにする思慮分別を身につけていることである。激しい感情を内に秘めながら、世間と交わっていくためにはそれを抑えることの必要性を痛感しているエリナに対して、マリアンは自然な感情の発露こそが最高に価値のある、また純粋な生き方と考え、それを抑える術など絶対に見習うまいと思っている。つまりエリナは、ある意味で「社会」対「個人」という関係を自分なりに調整する過程を終えている存在と言える。『分別と多感』も、オースティンが一貫して追求している女性の自己認識と社会への参入という主題に沿った捉え方ができる作品であるが、ここではその役割を担わされているのは、16歳のマリアンである。エリザベス・ベネットもエマ・ウッドハウスもそれぞれ自己認識という主題を背負わされている女主人公達であるが、マリアンの自己認識と社会への参入に至る過程は、彼女達とは比べものにならないほど痛ましさと苦悩に満ちている。それはマリアンがエリザベスやエマと比べて4、5歳も年若いという設定だけでなく、むきだしの感受性が社会という冷厳なまでの現実を前にして苦悶の声を上げているからである。物語は穏やかな皮肉を込めた描写で始まり、そして同じようなからかいを込めた描写で終わっていて、形の上では穏やかな喜劇の形式を取っているが、その間に挟み込まれている部分は限りなく悲劇に近い要素を内包している。本論では個人と社会との関係を“civility”に焦点を当てて追ってみたい。

オースティンは書き出しの部分で、その作品の基調と主題を設定する作家である。ダッシュウッド家の簡単な歴史を述べることから始まる『分別と多感』は、『自負と偏見』や『エマ』の引き締まった印象深い書き出しに比べると、確かにブッシュの言うようにいささか平板で、<sup>9</sup>のジョンとファニーの財産分与に関する会話で俄かに活気づく、いかにもオースティンらしい皮肉に富んだ第2章と比べると、幾分説明的な描写という印象は否めない。しかしオースティンはこの書き出しの部分で、他の作品にもましてエリナとマリアンを取り巻く社会の経済の基盤が男子相続にあること、また父親もしくは夫という後ろ盾なくしては女性の社会的地位がいかに脆弱なものであるかを明確に提示して見せる。持参金が一千ポンドというのは、ベネット家の姉妹のそれと同額であり、限嗣相続ゆえに父親が亡くなれば屋敷を出ざるを得ないベネット家の状況とも似ている。ただ違いは、そのような目に会う前に幸運にもエリザベス達は相応しい伴侶に巡り会うことができ、経済的不安から解放されている。もし運が悪ければ、ダッシュウッド姉妹を待ち受けているのは、ベイツ嬢のような窮状かもしれないのである。

父親の死によって、ダッシュウッド姉妹は経済的にも社会的地位においても非常に不安定な状況に追いやられる。何の経済的援助も保護も与えない異母兄のジョンは、ダッシュウッド姉妹にとっては、事実上存在しないも同然である。エリナは父親が亡くなった時点から、この不安定な状況への現実的対処を求められる。しかしマリアンにとっては、母親と姉のエリナが社会に対する盾のような役割を果たしている間は、彼女は子供時代そのままに、自分だけの世界に浸ることができる。16歳のマリアンは自分自身の世界こそが何よりも大切で、社会の方がそれに従属すべきものと考えている。エリナは結婚には愛情のみならず経済的自立が不可欠であることを十分認識しており、エドワードとの結婚の可能性をマリアンのように楽観視できない。マリアンにとって結婚は愛情が全てであり、しかも趣味や性格、考え方まで全ての一致を要求する。「私が本当に愛せる人なんてほとんどいないし、ましてや立派だと思える人なんてもっといないわね。世間を知れば知るほど、嫌になってくるわ。」<sup>10</sup>これは愛情のない結婚をしようとする友人シャー

ロットの打算や、姉のジェインに対するビングリーの心変りを目の当たりにした、20歳のエリザベスが思わず漏らした不満の言葉だが、「世間を知れば知るほど、私が本当に愛せる男性に出会うことはないという思いが強くなるの」(15)と、この言葉が17歳にも満たないマリアンの中から発せられるとき、そのいささか頭でっかちで生意気なまでの厭世観はエリザベス以上に滑稽な落差の効果を生み出し、かえってマリアンの未熟さを際立たせることになる。このように『分別と多感』では、オースティンのからかいは、もっぱらマリアンに向けられている。

「彼の姿や様子は、彼女がこれまで思い描いてきたお気に入りの物語の主人公そのままだった」(36) ウィロビーとマリアンの出会いは、オースティンの作品の中でも最もロマンチックなものである。お互いの兄と姉が結婚することで、親類として紹介されることになるエリナとエドワードの場合は、すでに出会いの時点から双方の家族関係や経済状態が係わってきている。それとは対照的に、散歩の途中転んで足を挫いたマリアンを、折よく通りかかったウィロビーが抱きかかえて家まで送り届けるというマリアンとウィロビーの出会いは、経済力や地位といった社会的要因を全て排除した状況下での出会いであり、マリアンの想像力を掻き立てるのに十分な劇的要素がある。お互いの趣味や興味、考え方までも同じであることを発見し、16歳6箇月にしてそのような存在の可能性をほとんど諦めかけていた、まさに理想の男性だと思い至る。何事においてもほどほどということのないマリアンはウィロビーへの愛情を大っぴらに周りの人々に披露する。自分の気持ちに正直であることこそ美德と考えるマリアンの言動は、彼女が無邪気な子供の域を出ない限りは、いささか大胆過ぎる率直さを伴うものであってもそれほど問題にはされない。しかし適齢期の娘として家の外へと一歩踏み出した途端、その率直さが思いもかけない波紋を生ずることになる。恋人同士をからかうことが趣味のようなジェニングズ夫人に、「本当にあんなに激しく恋焦がれている娘さんには、これまでお目にかかったことはないわ、うちの娘達も彼女に比べたらどうってことないくらいだわね、それでも十分のぼせ上がっていたものでしたがね」(156-57)と言わしめるほどに、マリアンは社会に対して余りにも無防備である。

マリアンはウィロビーがそばにいと、他の人間には目もくれず、彼の行動や意見には全て同意するほどの熱中ぶりを示す。夜会でのトランプや踊りでも別々にならないように結束して、周りの人間とはほとんど口もきかないようにするほどの徹底ぶりは、当然ながら皆のからかいの種になったが、それさえも気にならないぐらい幸せな気分浸っている。エリナは、ウィロビーの中にもマリアンと同様、他人について性急な判断を下し、礼儀を無視する傾向があることを見て取っている。マリアンやウィロビーは、レディ・ミドルトンやジェニングズ夫人の浅薄さを軽蔑し、ブランドン大佐の年齢を槍玉にあげて嘲笑するが、自分達だけの価値観で全てを決めてしまう彼等の性急さはまた、同時に彼等の子供っぽい狭量さと残酷さをも表している。ウィロビーがブランドン大佐を「みんなが誉めるけれど、誰からも関心を払われず、金も時間も持て余し、毎年上着を2着新調する男」と言うと、さらに付け加えてマリアンは「おまけに、才能も趣味の良さも元気もない。考え方には才気が感じられないし、感情には情熱もなく、声にも表現力が欠けているわ」(44)と、容赦がない。

それ自体何の不都合もない感情を抑えることこそ、陳腐で誤った観念への理性の恥ずべき服従と捉えるマリアンは、礼節の意味を完全に裏返して見せる。

「…私は余りにも気安く、楽しげで率直すぎたんだわ。礼儀作法という陳腐な考え全部に反することをしてしまったんだわ。よそよそしく、気力もなく、鈍感で欺瞞に満ちた態度を

取るべきところで、私はあけっぴろげに、正直に振舞ったんだわ。もし私がお天気のことや、道路の状態のことだけ話していたら、十分間に一回だけ口を開くようにしていたら、こんな非難は受けなかったでしょうに。」(40-41)

マリアンにとって礼節とは、“reserved”、“spiritless”、“dull”、“deceitful”を象徴し、“open”、“sincere”と対立するものであり、本来善であるべき人間性に対する束縛以外の何物でもない。エリナはマリアンが周りの状況を考慮することなく、ウィロビーからの贈り物として乗馬用の馬を嬉嬉として受け取ろうとしたり、紹介も招待もないのにウィロビーに連れられて、将来彼が遺産相続する予定のスミス夫人の家を勝手に見て回ったりすることの無分別さを指摘する。それに対して、マリアンからは「もし私のしたことに実際不適切なことが少しでもあれば、その時に気付いていたはずよ。だって間違っただけををしているときはいつだって分かるもの。それにそのような自覚があったら、楽しめなかったはずだわ」(59)という答えが返ってくる。しかしすでに自分の楽しみに囚われてしまっているマリアンは、願望が彼女自身が信奉する善であるべき内なる声をいかに簡単に歪めてしまうかということに気が付いていない。

マリアンにとって、礼儀とは「他の人々の意見に完全に従うこと」(81)であり、自らの判断力を他の人々のそれに従属させるものでしかない。それに対してエリナは、礼儀とはあくまで振舞い(“behaviour”)の問題と捉えている。

「…判断力を屈服させようなんて、私はそんなこと考えたこともないわ。これまで私がなんとか変えさせたいと思ったのは、すべて振舞いのことなのよ。私の言おうとしていることを混同してはいけないわ。私達のお知り合いみんなをもっと丁重に扱ってくれたらいいのにと度々思ったことがあるのは認めるけど、いつ私が大事な問題である人達の考えを取り入れたり、彼等の意見に合わせるように勧めたことがあったというの？」(81)

この作品では“civility”や“decorum”、“propriety”といった言葉が多用されているが、特に“civility”は、それぞれの登場人物の言わば試金石であるかのように何気なく、だが効果的に使われている。例えばファニーが、ノーランドの新しい女主人として夫と共に屋敷へ引っ越してきたとき、義理の母や妹達を“quiet civility”によって遇する。“quiet civility”という言葉だけで、ファニーの妹達への距離の取り方が的確に表現される。上辺の見事なまでの丁重さの下に、ファニーの利己心や傲慢さ、冷淡さが隠されている。相手を冷たく拒絶しながらしかも世間体を見事に保つ役割を果たす礼儀は、ファニーにとっては効果的な戦略として大いに威力を持つ。あるいはまた、エリナの兄のジョンは裕福なミドルトン夫妻と近づきになることは決して損にはならないと判断し、エリナの紹介で初めて訪問したとき、お互いの間で“abundance of civilities”が交わされる。ジョンもレディ・ミドルトンもお互いの身なりに上流階級風な優雅さを見て取り、大いに満足の意を表明する。そしてすぐさまファニーとレディ・ミドルトンとの出会いとなる。

レディ・ミドルトンも同じくらいダッシュウッド夫人を気にいった。双方に冷淡な利己心のようなものがあり、それがお互いを惹きつけたのだった。そして無味乾燥な物腰の礼儀正しさ(“an insipid propriety of demeanour”)と、理解力の全般的欠如においてお互い共鳴し合うところがあった。(200)

ファニーとレディ・ミドルトンの見事なまでの空虚さが表されている。

ファニーとジョンがミドルトン夫妻を主賓に招いてのパーティは、彼等の性格を反映して極度の「会話の貧困」ぶりを露呈するが、そこで示されるエリナやマリアン、ルーシーの反応は、礼儀とそれぞれの人物の本質との関係を端的に示している。ファニーとレディ・ミドルトンは、それぞれの息子のどちらの方が背が高いかで長々と議論するが、意見を求められたルーシーは、どちらの側も満足させたくて、巧妙に双方の肩を持つとうとする。エリナは、レディ・ミドルトンの息子の方が背が高いと一度だけ意見を述べ、それによってファニーとその母親の機嫌を損ねることになるが、マリアンはそのようなことは考えたこともないので、意見などないとはっきり答え、全員を憤慨させることになる。利に聡い野心家のルーシーは、礼儀を相手に取り入るための戦略として積極的に活用する。一方マリアンにとって礼儀は偽瞞でしかない。

社会との交わりの中で、マリアンは幾度となく社交辞令を言わざるを得ない状況に遭遇するが、多くの場合沈黙という手段でそれをかわしていく。

「レディ・ミドルトンはなんてお優しい方なのでしょう」と、ルーシー・スティールが言った。マリアンは黙っていた。どんなに些細な場合でも、自分が感じてもないことを言うことはマリアンにはできなかった。それゆえ、礼儀上やむを得ないときはいつだって、嘘を言う役目は全てエリナに回ってきた。今もこうして求められて、エリナはレディ・ミドルトンのことを実際に感じている以上に熱を込めて話すことで、最善を尽くした。もっともその熱心さはルーシーには及ぶべくもなかったが。(105)

ここでは礼儀の持つ二面性が見事に表明されている。礼儀が本心を被い隠す「嘘」にもなれば、またその逆に本心を被い隠す「防御」の役割を果たすことにもなるのである。マリアンは正直であろうとするがゆえに、社会との軋轢を生ずるが、エリナは軋轢を回避するために礼儀を利用する。ロバート・フェラズが初めてエリナに紹介されたとき、彼の“easy civility”は彼の軽薄さや自惚れをエリナに納得させるに十分な根拠となる。兄のエドワードの不器用さを嘲りながら、自分の世渡り上手を得意げに披露するロバートに対して、エリナは反論する値打ちもないと、内心の軽蔑を礼儀正しい沈黙という形の相槌により徹底的に被い隠す。エリナは積極的に嘘をつく偽瞞を回避するために、マリアンとは違って沈黙を礼儀の積極的な戦略として用いている。オースティンがこの作品で繰り返し描き出すのは、「個人」対「社会」という関係における礼儀のもつ意味合いについてであると言える。

エリナにとって、礼儀は本心を被い隠す防御の手段となるが、エドワードを巡ってルーシーの本心を探ろうとする場面では、防御としての礼儀をマリアンが嫌悪する偽瞞に陥りかねないほど意図的に利用する。エリナに嫉妬心を抱いたルーシーが、自分の優位性を主張するためにエドワードとの四年間にわたる秘密の婚約の事実をエリナに打ち明けることになるが、表面上の礼儀正しさの陰で冷たい火花が激しく散らされ、礼儀正しい悪意の応酬となるこの場面は、オースティンの全作品の中でも出色の出来映えであると言える。エリナは最初の衝撃から立ち直ると、本心を隠す防御としてのみならず、相手の本心を探るための有効な手段として礼儀を利用する。エリナは、自ら進んでルーシーとその話題を取り上げることで、自分を完全に第三者の立場に置き、ルーシーの悪意から自分を守ると同時に、ルーシーの真意を探り出そうとする。つまりエリナにとって、礼儀は防御と攻撃のための優雅な武器にも成り得るのである。

ルーシーは、エドワードとの四年間もの婚約期間は愛情を試すのに十分すぎる長さであり、あらゆる試練に耐えてきたふたりの愛情は揺るぎないものだと言ひげに語る。それに対してエリナは、ルーシーへの同情を示しながら同時に痛烈な皮肉を交えるという高度の社交術を展開する。

「そのような確信を持てることこそ、あなたにとっては何よりなことすわ。そして彼の方もきっと同じように、あなたへの信頼感に支えられていることでしょう。多くの人達の間で、また多くの状況のもとで、四年間もの婚約期間中には当然ありがちなことですが、もしあなた達の間でお互いの愛情が薄れてしまっていたら、あなたの立場は本当にお気の毒なものになっていたことでしょう。」

ルーシーは、ここで顔を上げた。だがエリナは自分の言った言葉に疑念を招くようないかなる表情も顔に出さないように用心していた。(127)

まさに礼儀は強力な武器にも成り得る。ルーシーは自分たちの愛情の強さを強調してエリナを牽制するが、エリナの反応も「私に対する彼の愛情が疑う余地のないものとしたら、高潔で思いやりがあり、博識な彼が、教養のない、狡猾で利己的なルーシーのような女を妻にして満足できるのだろうか」(120)と手厳しいものである。

エリナは、ルーシーからエドワードとの婚約の事実を聞かされても、自分に対するエドワードの愛情を疑うことは決してない。エリナは「彼の愛情はすべて私だけのもの」(119)と言い切る自信があり、ルーシーとの婚約の事実にも係わらず心の中では彼への想いを抱き続ける。オースティンの先輩作家にあたるファニー・バーニーは、『エヴリーナ』(1778)や『シシーリア』(1782)の中で、相手の男性からの明白な意思表示もないうちに女性が一方的に愛情を抱くことの危険性や、容認されない不幸な愛情は、理性によって抑制すべきだとする自己抑制の必要性を繰り返し描いている。その根底にあるものは、「女性の評判ほど傷つきやすいものではなく、それはこの世で一番素晴らしいものだが、また一番脆いものでもある」<sup>9)</sup>という、判断の誤りがたちまち墮落への第一歩となりかねない女性を取り巻く社会的制約の厳しさである。バーニーの女主人公達は常に、過ちを犯すことを恐れて、行動し選択することの苦痛と恐怖感に足をすくませている。それに比べるとオースティンの女主人公達は、はるかに逞しく、したたかである。マリアン・ウィロビーへの大っぴらな愛情表現は、周りの人々にとってはふたりの婚約を確証させるに足る根拠となるが、マリアンにとっては世間の思惑とは無関係に、何ら恥じることもない感情の表明に他ならない。さらにエリナも、表には決して出さないがエドワードの自分に対する愛情を確信しており、彼への想いに苦しむことはあっても、その想いを抹殺してしまうことはない。マリアンとエリナの違いは、愛情を表に出すか出さないかの行動表現における違いにすぎない。さらに言えば、マリアンはウィロビーへの失恋という痛手を被っても世間的体面を失うこともなく、よりよい結婚を手に入れることができるのである。

もちろん、この作品には母娘二代にわたる、二人のイライザの誘惑と転落の物語のエピソードも組み込まれている。二人のイライザのエピソードは、ブランドン大佐の情熱と、ウィロビーの放埒さを同時に浮かび上がらせる意図をもって描かれたものだが、このエピソードが他の部分と比べていささか唐突の感を免れないのは、オースティンにしては余りにも型にはまりすぎているという印象を与えるからである。まさに18世紀の小説に登場する典型的な誘惑と墮落の物語であり、フィールディングやスモレットが好んで用いる、本筋に脱線という形で挿入されるエピソード

ードといってもいいような話である。言わば「イライザ・ウィリアムズ嬢の物語」として挿入されるべきようなエピソードである。確かにマリアンは、彼女の純粋な感受性ゆえに痛ましさを伴っているが、この作品の基調はあくまでも穏やかな喜劇性にある。それに比してイライザ・ウィリアムズのエピソードは、余りにも型にはまった典型的な「感受性の悲劇」の物語であり、オースティンの作品世界のもつ喜劇性を寄せつけない。二人のイライザ像が受動的で平板すぎ、オースティンの描く逞しくしたたかな女性像との間に違和感を生じ、かえってこのエピソードの非現実性を際立たせることになっている。

婚約していると思われていたマリアンとウィロビーが実はそうではなく、全く予想外のエドワードとルーシーの秘密の婚約が明らかにされたりと、物語は同じような状況が錯綜しながら進行していく。マリアンはウィロビーとの関係が実質的な婚約以外の何物でもないと、形式よりは実質を重んじ、ルーシーは実体よりも、婚約という形式にこだわる。また恋人同士の手紙や愛情の証として切り取られた髪の毛など、同じような小道具が繰り返し用いられて、エリナとマリアンのそれぞれの恋は、似たような展開をたどる。しかしエリナは、エドワードの無分別な婚約を責めても、彼自身の高潔さや誠実さへの信頼感が揺らぐことはない。一方マリアンは、ウィロビーの不実な振舞いのみならず、彼の本質への疑念に二重にさいなまれることになる。ウィロビーが安逸を求めて金銭的結婚をしたこと以上に、イライザへの誘惑と遺棄が象徴する彼の放縦と偽瞞性にマリアンの繊細な感受性は深刻な打撃を受ける。自分自身の率直な表明こそが美德であり、価値あるものとするマリアンの生き方は、その無邪気な無防備さゆえに、ウィロビーに象徴される偽瞞に満ちた社会を前に自らを守る術がない。

マリアンのウィロビーとのパーティでの再会、そして思いがけないウィロビーの反応、マリアンの彼に釈明を要求する手紙と続く一連の場面は、エリナとルーシーの抑制された伶俐な対決の場面とは対照的に、激情と緊迫感に満ちている。シャーロット・ブロンテは、ジェイン・オースティンが「激しいもので読者の心を波立たせることもなければ、深遠なものでかき乱したりすることもない。情熱は彼女には全く無縁なものである。…感情に対してさえも、時折上品ではあるが、冷ややかな認識以上のものは与えようとしない」<sup>(10)</sup>として、オースティンが情熱とは無縁の作家であることを手厳しく批判している。しかしマリアンの苦悩と絶望から生み出される緊迫感、オースティンが情熱とは無縁の作家であるなどとは決して言い切れない、思いがけない激しさを示している。マリアンの激情は、オースティンの持つ別の可能性、悲劇の分野の開拓への可能性をも感じさせる迫力がある。

屈辱と絶望感を隠そうともしないマリアンに、エリナは誇り高く気概を見せつけ世間の悪意をはね返すように説得する。エリナは世間の侮辱や悪意をはねつけ、同時に自らを守るためには、社会と自分の間に防御の網を張り巡らし、むき出しの自分を隠すことが必要だと考えている。そしてこの防御の網の役割を果たすものが、社会的約束事としての礼儀であると言える。それは社会への無条件の屈服を意味するものではなく、自分自身を守るべき手段と成り得るものである。エリナは心の中ではエドワードへの想いを終始変わらず抱き続けているが、社会的約束事としての礼儀は、社会に浸食されることなく心の中の自由を守るための有効な手段となる。もちろん、ファニーやルーシーたちもそれぞれ保身のために礼儀を活用する。ウィロビーでさえも、避けていたマリアンと予想外の再会をしてしまったとき、よそよそしい礼儀という強固な鎧に身を固めて、マリアンを拒絶すると同時に自己保身をはかる。彼等の礼儀に利己的な動機が作用しているとしても、オースティンはそのような行動をからかうことはあっても、厳しく断罪すること



はない。オースティンは社会的約束事としての礼儀を、個人と社会、個人と個人との間の緩衝装置の働きをするものであり、本質的には寛大なものと捉えているように思われる。

悲嘆の中に浸り切っていたマリアンも、エリナがマリアンと同じ状況にあること、しかも四箇月も前から同じように絶望を抱え込んでいたことを知り、エリナに対して思いやりに欠けた行動を取り続けていた自らの自己中心性に目覚め始める。まず自分が中心に存在し、社会はそれに従属するという子供っぽい自己中心的な考え方から大人の認識への移行、社会への順応の兆しが見え始めるのである。それは、それまで軽蔑していた社会の約束事を少しずつではあるが受け入れるという行動となって現れる。

エドワードとルーシーの婚約が表沙汰になったとき、エリナはマリアンから彼等ふたりに対して自分の感情を露にすることなく冷静に対処する約束を取りつける。

慎重に振る舞うという約束を彼女は見事に果たした。ジェニングズ夫人がその話題について話すこと全てに顔色一つ変えず耳を傾け、何ひとつ異を唱えず、「ええ、そうですね」と答えるのが三度も聞かれた。彼女は夫人がルーシーを誉めたたえる言葉も別の席に移っただけできちんと聞いていたし、夫人がエドワードの愛情を話題にしたときも、喉をひくひくさせただけだった。(230)

しかし、マリアンが真の自己認識に至る過程は、痛ましさに満ちている。それは、ある意味でひとつの死と復活、再生の過程であり、意識が混濁し生死の境をさまようマリアンの苦しみは、再生への苦しみを象徴していると言えよう。死の淵から生還したマリアンは、それまでの自分を振り返って自分の病気は自らが招いたものであり、もしそのまま死んでいたら、その死は「自滅」以外の何物でもなかったことを認識する。

「…病気のおかげで私は考えさせられたわ。真剣にこれまでのことを振り返ってみる時間と平静さを病気が与えてくれたの。…去年の秋、彼と知り合ってから私の振舞いには、自分自身に対する無分別さと他の人への思いやりのなさしか見られなかったわ。私自身の感情が私の苦しみを生み出す原因になったのだし、そういった苦しみのもとでの忍耐力がなかったばかりに、私はもう少しでお墓に連れていかれるところだったということが分かったの。病気になったのも原因は全て私にあり、自分でもあのとき間違っていると感じていたほどに、自分の身体のことには無頓着だったせいなのよ。もし死んでいたら、それは自殺行為だったでしょうね。…」(303)

ここで初めてマリアンは、外側から自分自身を見つめ直すことになる。これからは「他の人達と交際するとしても、それは自分の気性が抑えられ改心したこと、そして生活のささやかな義務である礼儀作法を穏やかに忍耐力をもって実行できることを示すためのものとなるでしょう」(304-5)とまで表明する。この結末をめぐる様々な異論が唱えられている。タナーは、マリアンの病気が落ち着き安定した社会生活に入り込むために払わされるべき代価であるとし、この社会で市民権を得るために彼女の溢れんばかりの生命力が飼い慣らされてしまう結末に懐疑的である。そしてマリアンの病気を再生ではなく実質的な死と見做し、周りの人々の思惑通りにブランドン大佐と結婚するマリアンは、「本当のマリアン」ではなく単なるロボットにすぎないとして

いる。<sup>(11)</sup>あるいはまたマドリックは、マリアンは完全に共感できる人物として描かれているが、それはマリアンが作者の倫理的意図や作品の趣旨に反して、作者自身意識していない作者の中の精神の深さを反映しているためであり、まさにその理由ゆえにマリアンは貶められ、葬り去られなければならない運命にあり、「因習という棺」に入れられることになるのだとしている。そしてこの作品の中心でもあり命でもあるマリアンは、ウィロビーではなく作者自身に裏切られているとまで言っている。<sup>(12)</sup>

確かに、マリアンは、作品の前半部でみられるようなからかいを込めた調子にも係わらず、その純粋さや真摯さゆえに読者の共感を呼ぶに足る大変魅力的な人物に仕立てられ、マリアンの苦悩は、悲劇に相応しい集中力と迫力をもって描かれている。またその純粋な悲劇性が、雑駁な日常性の描写の積み重ねの中でいささかそぐわないほど突出している印象を与えるのも事実である。しかしオースティンは、あくまでも非日常性への志向を排除していく作家である。従ってオースティンがマリアンに与えた「驚くべき運命」は、むしろ作者自身の、現実に対する強靱な平衡感覚の表れと見做すことが出来るのではないだろうか。

マリアン・ダッシュウッドは、驚くべき運命に生まれついていた。彼女は自分自身の考えの誤りを発見し、彼女の最もお気に入りの行動原理に自ら逆らって行動する運命にあったのだ。彼女は十七歳という遅い年齢でようやく抱いた愛情を克服し、大いなる尊敬と強い友情以上のいかなる感情も持たず、別の相手に進んで結婚の承諾を与える運命にあったのだ。しかもその別の相手とは、以前の愛情の成り行きに彼女同様苦しんだ経験があり、二年前には彼女から結婚するには年をとりすぎていると見做され、今でもフランネルのチョッキで身体を保護しているような男性なのだ！（333）

オースティンは、意図的に大げさな、からかいに満ちた表現を用いることによって、逆にマリアンとブランドン大佐との結婚が、決して「驚くべき運命」などではないことを強調している。マリアンの運命は、取り立てて珍しくもない、多くの人々が辿るありふれた人生に過ぎない。こうして、マリアンは悲劇の高みから一気に俗世という日常性の中に落とされるのだが、この強烈な落差こそオースティンが、マリアンのみならず我々読者に用意した仕掛けでもあり、イライザの物語に見られるような、当時の典型的な感受性の悲劇の小説のもつ不自然さを改めて浮かび上がらせるオースティンなりの答えであると思われる。オースティンの主眼はあくまでも、社会からの孤立ではなく、社会への参入に置かれているのである。

しかしオースティンには一方で、社会への参入の過程、つまり子供から大人へと移行していく過程で、その代償として支払わされるべきものがあることも十分認識しているように思われる。エリナが「二、三年もすれば、彼女の考え方も良識と観察に基づいた道理にかなったものになるでしょう」と、マリアンの子供っぽい独りよがりな言動への不満を漏らす場面があるが、それに対してブランドン大佐からは次のような言葉が返ってくる。「多分そうなることでしょう。しかし若い人の偏見には何かとても愛すべきものがあって、そういったものがより一般的な考え方を受け入れ、取って代わられていくのを見るのは残念な気がします。」（47-48）もちろんエリナは、熱烈さの魅力や世間に対する無知では補いきれない不都合があると反論するが、ブランドン大佐の言葉には、無邪気で向こう見ずとも取れる率直さや純粋さのもつ眩しさが社会の枠に閉じ込められ、分別や常識に取って代わられることを惜しむ気持ちが表れている。ナイトリー氏がエマ

の甘やかされた子供時代の生意気を慈しんだように、ブランドン大佐の中にもマリアンの抑制を知らない伸びやかさへの礼賛がある。オースティンは『分別と多感』の中で、子供から大人の認識へと移行していく過程において、成熟と引き換えに失うべきものもあることに目を向けている。そしてその喪失を密かに悼む気持ちが、この作品に一種のほろ苦さを添えているように思われるのである。

オースティンの作品の中で一番最初に出版されることになる『分別と多感』は、登場人物、特にエドワードとブランドン大佐の人物造型が弱かったり、エリナの教訓癖、あるいはブランドン大佐のいささか唐突で不自然さを伴ったイライザについての打ち明け話など、明らかに初期の作品と思わせるぎくしゃくした生硬さがある。しかし同時に、ファニーとジョンの財産分与をめぐる会話、エリナとルーシーの優雅でしかも悪意に満ちた応酬、マリアンの苦悩の描写に見られる集中力や迫力など、オースティンの作品の中でも出色の出来映えと言えるような優れた描写も混ざりあっている。分別と多感という目新しいとは言えない主題を取扱い、時折顔を覗かせる生硬さにも係わらず、少女から大人へと成長していく過程を描き出すこの作品は現代の読者にとっても意外な新しさと面白さを持っており、また作品として安定しておさまりきっていないゆえに様々な可能性への芽を感じさせてくれる作品でもあるように思われる。

## 注

- (1) Austen-Leigh, James Edward. *Memoir of Jane Austen*. London: Century Hutchinson Ltd., 1987, p.49
- (2) Bush, Douglas. *Jane Austen*. London: The Macmillan Press Ltd., rpt., 1978, p.83
- (3) Austen, Jane. *The Works of Jane Austen, Vol. VI, Minor Works*. ed. Chapman, R.W., Oxford University Press, 1967, p.78
- (4) *Ibid.*, p.85
- (5) Austen, Jane. *Sense and Sensibility*. Oxford University Press, rpt., 1984, p.87.  
本書からの引用は以後、本文中にページ数のみを記す。
- (6) Austen, Jane. *The Works of Jane Austen, Vol. VI, Minor Works*. pp.93-94
- (7) Bush, *op. cit.*, p.78
- (8) Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Oxford University Press, rpt., 1987, p.121
- (9) Burney, Fanny. *Evelina*. Oxford University Press, rpt., 1986, p.164
- (10) Southam, Brian. *Jane Austen: The Critical Heritage, Vol. I*. London: Routledge & Kegan Paul, rpt., 1986, p.128
- (11) Tanner, Tony. *Jane Austen*. London: Macmillan Education Ltd., 1986, pp.99-101
- (12) Mudrick, Marvin. "Jane Austen: Irony as Defense and Discovery" in '*Sense and Sensibility*', '*Pride and Prejudice*', and '*Mansfield Park*', Casebook Series, ed. Southam, B. C., London: The Macmillan Press Ltd., rpt., 1982, pp.114-15